

今週の為替相場見通し(2025年10月27日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		150.27 ~ 153.06	152.90	151.00 ~ 156.00
ユーロ	(ドル)		1.1577 ~ 1.1675	1.1627	1.1500 ~ 1.1800
(1ユーロ=)	(円)		175.26 ~ 177.77	177.67	176.00 ~ 180.00
英ポンド	(ドル)		1.3289 ~ 1.3441	1.3318	1.3150 ~ 1.3550
(1英ポンド=)	(円)	*	201.82 ~ 203.99	203.47	201.00 ~ 205.00
豪ドル	(ドル)		0.6473 ~ 0.6529	0.6514	0.6450 ~ 0.6600
(1豪ドル=)	(円)	*	97.55 ~ 99.59	99.57	98.00 ~ 100.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

国際為替部 為替営業第二チーム 伊藤 基

(1)今週の予想レンジ: 151.00 ~ 156.00 円

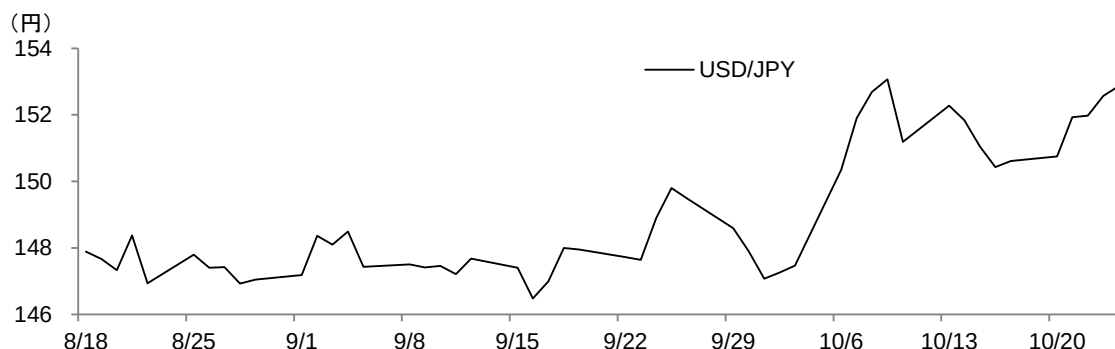
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は高市政権の誕生および財政拡大政策に対する期待感などから週を通して堅調な推移となった。週初20日のドル/円相場は、150円台後半からスタート。米地銀の信用懸念や米中対立拡大の懸念が後退するなかで、ドル買い円売りが優勢な値動きになる場面が見られたものの、高田日審議委員が講演にて、「利上げの機が熟した」との見方を示すと、上昇幅を徐々に縮小させる展開となった。一方で、21日は、首班指名選挙にて高市氏が選出されたことを受けて、円売りドル買いの流れが強まり、152円台まで上値を伸ばした。22日、日経平均株価やゴールドの下落を横目に、151円台半ばから後半を中心とした方向感に乏しい値動きとなった。23日、高市新政権による財政拡大政策などが改めて意識される中で、米株式市場や米金利の上昇などを横目に1日を通してじりじりと下値を切り上げていった。24日、実質五・十日ということもあり、東京時間朝方からドル買いが優勢な値動きとなり、夕刻には153円台まで上昇する場面が見られた。米国時間に公表された米9月CPIが市場予想を下回る結果になると、発表直後は152円台前半まで一時的に下落したものの、その後は短時間に下げ幅を縮小させ、結局は152.90円で週末を迎えた。

今週のドル/円相場は、堅調な推移を予想。28日(火)に日米首脳会談、28日(火)~29日(水)にFOMC、29日(水)~30日(木)に日銀金融政策決定会合、30日(木)には韓国にて米中首脳会談の開催など材料が目白押しの一週間となり市場のボラティリティも相応に高まる可能性が高そうだ。こうしたなかで、日銀金融政策決定会合では追加利上げを見送る公算が高まっている。今会合では展望レポートも公表されるが、高市新政権が誕生して間もない今のタイミングで追加利上げに積極的な姿勢を示すことは難しいと思われるだけに、先々の追加利上げに対する期待感が剥落することによって、円売り圧力が一段と強まるイベントになると見ている。加えて、週後半に開催される米中首脳会談で一定の成果が確認されれば、米中対立の拡大懸念が後退することで幅広い通貨に対してドルが買われる展開も想定される。日銀の金融政策決定会合を契機とする円売り材料と米中対立懸念の緩和をカタリストにしたドル買いの合わせ技が決まることで、ドル/円相場は週後半にかけてドル高円安基調が強まっていくであろう。

(3)先週末までの相場の推移

先週(10/20~10/24)の値動き: 安値 150.27 円 高値 153.06 円 終値 152.90 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

国際為替部 為替営業第二チーム 西 拓也

(1) 今週の予想レンジ: 1.1500 ~ 1.1800 176.00 ~ 180.00 円

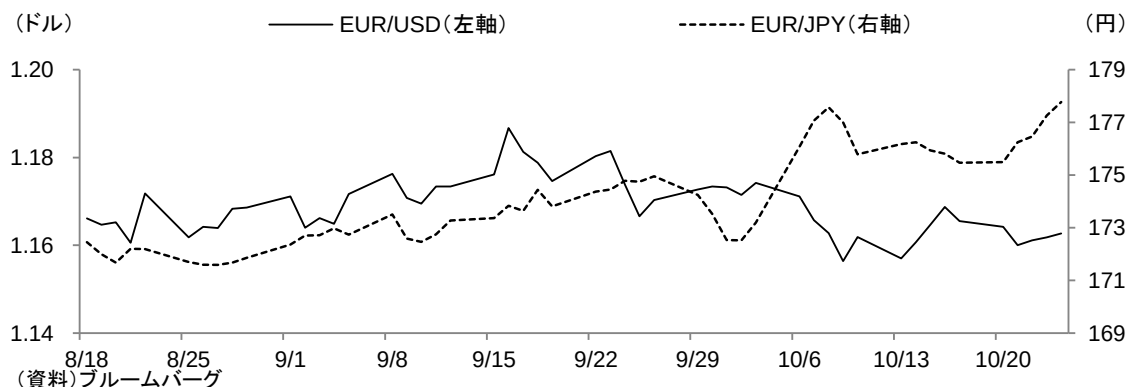
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は、週半ばにかけてじり安となったが、その後は下げ止まる展開となった。週初20日、ユーロ/ドルは1.16台半ばでオープン。東京時間はややドル売り優勢の中でユーロ/ドルは小幅高となり、週高値となる1.1675を付けた。海外時間に入ると一転し、材料難の中で上値重く推移。21日、ユーロ/ドルはドル高地合いや独金利低下を受けて下落基調となり、1.16ちょうど付近へ。22日、ユーロ/ドルは米金利上昇が重しとなって一時週安値となる1.1577まで続落したが、米国による対中輸出規制強化に関する報道を受け、ドル売りに転じると1.1620近辺まで反発。23日、ユーロ/ドルは材料難の中で1.16ちょうどを挟んで方向感なく推移した。24日、東京時間のユーロ/ドルはドル高優勢の中で上値重く推移も、独10月PMIが予想を上回ったことで一時的に1.1630近辺まで上昇。その後、米9月CPIが予想を下回るとドル売り相場の中で再び上昇し1.16台半ばへ。一巡後は上げ幅を縮小し、結局1.1627で越週した。

今週のユーロ/ドル相場は、中銀会合や政治イベントなどが目白押しの中でも底堅い推移を想定する。米国では28日(火)~29日(水)にFOMC、欧州では30日(木)にはECB政策理事会が開催される。FOMCでは▲25bpの利下げが確実視されているため、注目点はQT(量的引き締め)停止についてのコミュニケーションとなる。パウエルFRB議長は今月14日(火)、今後数か月以内にQTを停止する可能性に言及した。今後数回の会合でのQT停止を示唆すれば、ドル売り材料となりやすい。一方、ECB政策理事会では政策金利据え置きが大方の予想となっている。ラガルドECB総裁を始めECBメンバーの多くも利下げサイクルの終了、現状の政策金利が適切としており、市場予想との齟齬はない。先週発表された堅調な域内PMIもサポート材料となろう。米欧金融政策の違いが素直に意識されやすく、ユーロ/ドル相場は底堅い値動きとなるのではないかと。一部にユーロ高進行によるインフレ下振れを懸念する声はあるため、今週公表される域内インフレ指標には注意しておきたい。米欧中銀会合以外に注目度が高い経済イベント・経済指標としては、28日(火)に日米首脳会談、30日(木)に米中首脳会談、ユーロ圏7~9月期GDP速報値、独10月HICP速報値、31日(金)にユーロ圏10月HICP速報値などが予定されている。米中貿易摩擦、本邦高市新政権、米露対立も市場の重要テーマとなる中、アジア歴訪中のトランプ米大統領の発言によるボラティルな相場変動も予想されるため、関連報道には十分警戒しておく必要がある。

(3) 先週までの相場の推移

先週(10/20~10/24)の値動き: (対ドル) 安値 1.1577 高値 1.1675 終値 1.1627
(対円) 安値 175.26 高値 177.77 終値 177.67



3. 英ポンド

欧州資金部 神田史彦

(1) 今週の予想レンジ: 1.3150 ~ 1.3550 201.00 ~ 205.00 円

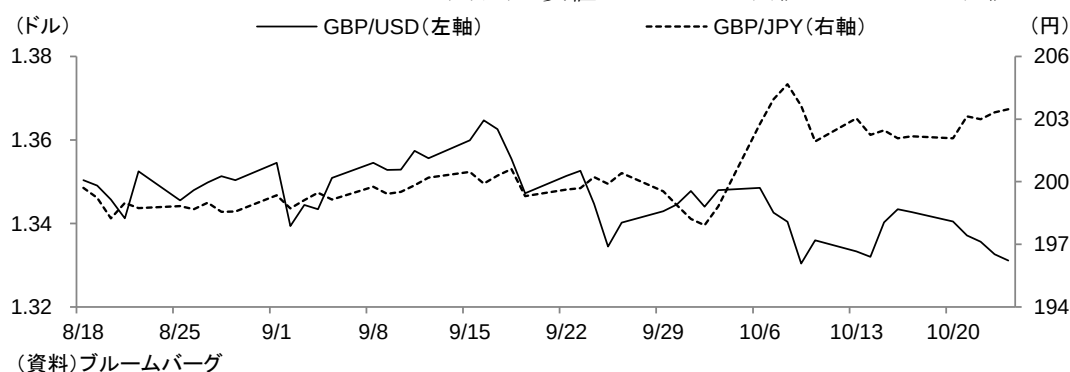
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は上値の重い展開。週初20日は1.34台前半で始まる。予想を上回る決算が続き上昇する米株を背景にドルが堅調。21日は上昇が続いていた金など貴金属類が暴落となる中、ドル堅調が緩やかに続き1.33台の推移。22日は英9月CPIが予想を下回ると1.33台前半へ。23日は、引き続きドル買い優勢で1.33台前半推移。週末24日は、英9月小売売上高と英10月の各種PMIがいずれも事前予想を上回るも影響は限定的。その後米9月CPIが予想を下回ると1.33台半ばへ反発も勢い続かず、だった。先週の英ポンドは対円で上昇。週初20日に202円台前半で始まる。自民党と維新の連立合意のヘッドラインに上下に振れるも影響は限定的。円安が続く中、203円を挟んだもみ合いに。週末にかけて若干上放れ203円台後半で取引された。

今週の英ポンド相場は、上値重い推移継続を見込む。英指標面からは特筆すべきものはなし。英中銀の政策金利については、特に先週の英9月CPIの発表後に年内の追加利下げの織り込みが強まった形。英中銀政策金利決定は11月6日(木)となっており、そちらでの織り込みも従前より高まったとはいえ依然3割を下回る程度で、その次の12月利下げを市場は睨み始めた。一方で米経済指標での注目は28日(火)~29日(水)のFOMC。現状▲25bpの利下げをスワップ市場はほぼ織り込んでおり、エコノミスト予想も同様に波乱は想定していない。直近また騒がしくなっている米関税だが、米中の会談が30日(木)に行われる予定で、市場センチメントの改善に繋がるか注目だ。オプション市場で観測されるインプライド・ボラティリティは今週の対ドル変動を上下に1%弱引き続き織り込んでいる模様だ。

(3) 先週までの相場の推移

先週(10/20~10/24)の値動き: (対ドル) 安値 1.3289 高値 1.3441 終値 1.3318
(対円) 安値 201.82 高値 203.99 終値 203.47



4. 豪ドル

国際為替部 為替営業第二チーム 原田 脩平

(1) 今週の予想レンジ: 0.6450 ~ 0.6600 98.00 ~ 100.50 円

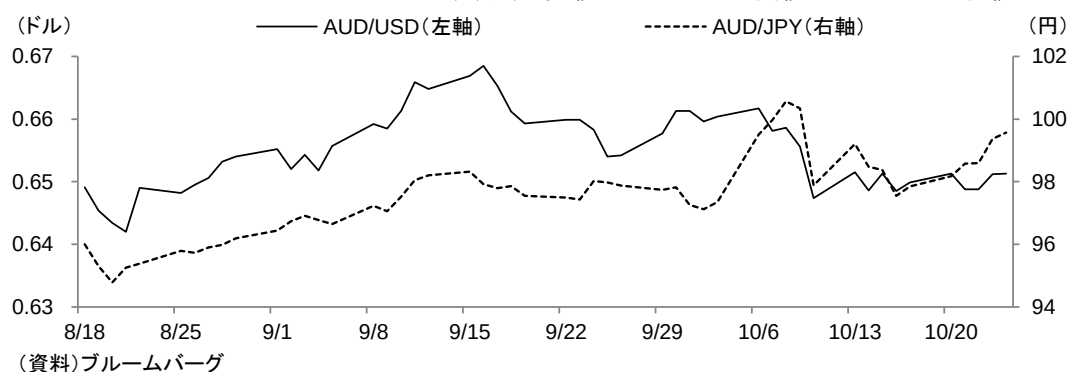
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は堅調な推移となった。週初20日は0.6501でオープン。0.6484まで下落する場面もあったが、米株高が進み0.6521まで反発した。21日の豪ドルは、全般的にドル高が進み週安値となる0.6473まで下落した。トランプ米大統領が「習近平中国国家主席との会談は実現しないかもしれない」との発言があったが値動きは限定的だった。22日の豪ドルは、米国が中国への輸出規制の強化を検討しているとの報道によって0.6480付近まで下落したが、値動きは限定的だった。23日の豪ドルは、序盤は0.6480付近で推移したが、じりじりと値を上げる展開となり0.6518まで上昇した。24日はブロックRBA総裁が講演を行ったものの、金融政策への言及は無かったため相場への影響は限定的だったが、米9月CPIが市場予想を下回ると一時ドル売りが進み週高値となる0.6529まで上昇。結局0.6514で越週した。

今週の豪ドル相場は下落基調の展開を想定する。30日(木)に韓国で米中首脳会談が開催される。26日(日)にベッセント米財務長官が、米国が中国に対する100%の追加関税賦課を見送る方針を示しており、米中貿易戦争勃発懸念の後退からドル買いが進むと想定する。ただし、万が一交渉が難航した場合は、ドル売り圧力が高まる可能性があるだろう。他方で28日(火)~29日(水)に開催される10月FOMCでは▲25bpの利下げが織り込まれており、FOMC直後は一時的にドル売り圧力が高まる場面があると想定するが値動きは限定的であろう。また、11月4日(火)のRBAの金融政策決定会合では利下げ織り込みが0.5回程度まで後退したが、12月会合は0.8回程度まで織り込みが進んでおり、年内1回の追加利下げは濃厚であると考えられる。今週発表される経済指標の結果に応じて、11月利下げ織り込みは左右されるだろう。29日(水)に豪9月CPI、豪7~9月期CPIトリム平均値、30日(木)に豪7~9月期輸出物価指数・輸入物価指数、31日(金)は豪第7~9月期PPI等の発表を控えているが、これらの豪経済指標が市場予想を下回った場合は豪ドル売りを誘発するだろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(10/20~10/24)の値動き: (対ドル) 安値 0.6473 高値 0.6529 終値 0.6514
(対円) 安値 97.55 高値 99.59 終値 99.57



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償のみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。